

菊池 一雄	彫刻	東京帝国大学文学部美学美術史学科卒業
山本 豊市	彫刻	錦城中学校卒業、太平洋画会研究所入所
石川 栄耀	建築	東京帝国大学工科大学土木工学科卒業
佐藤 謙三	音楽	官立東京音楽学校本科器楽部卒業
渡辺 武夫	師範油画	東京美術学校油画科卒業
清水 正雄	漆工	東京美術学校漆工科卒業
渡辺 洋	日本画	東京美術学校日本画科卒業
村田 徳松	彫刻	京都市立美術工芸学校卒業
若林 作司	補作員	金工師柴崎由太郎氏に就きて学び大正十五年自営す。 彫金家駒宮種二郎氏（春岳）のもとにて彫金の研究をなす。
石川 信夫	同	盛岡工業専門学校機械科卒業
毛塚 真一	同	東京文理科大学文学部哲学科卒業

（大学設置要項文書綴所収「現在経営してゐる学校の現況」より。）

一部訂正、加筆）

④ 最後の校長村田良策

昭和二十四年七月二十七日、村田良策は東京芸術大学美術学部長兼東京美術学校校長兼東京芸術大学美術部附属工芸技術講習所長に任命された。昭和二十七年三月三十一日、東京美術学校廃校とともに

校長の兼務を解かれる。

村田は明治二十八年栃木県佐野市に生まれ、大正八年東京帝国大学文学部美学美術史学科を卒業。昭和十年まで法政大学、東洋大学の教授をつとめ、また、同八年から同十五年まで文部省社会教育局嘱託講師をつとめた。東京美術学校では大正十一年四月から英語の講師に任ぜられ、同十三年九月にはさらに美学、西洋彫刻史授業を増嘱され、同十四年四月からは英語、美学、色彩学を担当。同十八年五月教授に就任し、同年八月生徒主事兼務となった。東京芸術大学に三十七年一月まで在職し、その間、二十六年六月には神奈川県立近代美術館初代館長に就任している。

このように四十年間という長い間勤続した村田は、退官の頃それを振り返って「美術学校と私」『現代の眼』第八十六号。昭和三十一年一月）の一文を書いている。それによると本校では矢代幸雄が留学したあとの講義を板垣鷹穂と加藤成之が担当したが、加藤も間もなく留学することになったので、大学院生だった村田に後任を依頼したのだという。次の文を読むと、苦勞もあったとはいえ、村田が本校教師という仕事を好んでいたことが推測される。

〔上略〕ともかく親のすねかじりで勉強でもあるまいと、親への見得もあつて加藤君の話にのり、結局研究室通い半分上野通い半分と中途半端なつとめをすることになった。正木校長にお会いしたら将来の私の希望など訊かれた。結城素明先生にも会ったらしいとのことであつた。あとでわかったことだが学科の講師の手当は主任級の先生たちの俸給のあたまをはねて下さったということ

である。大正十年秋のことで、お手当は月二十円、ちょうど下宿料が二十円であった。これを母親に知らせたら、おまえも一人前になったねと手紙で返事が来た。なんとなく一人前になった気がした。

英語が週十時間。こちらが若いし自信もない。自分より歳の上らしい生徒もたくさんいる。当時美校の角力部は全盛時代だったとかで強そうな奴が威圧的な代返をやる。くやしいから教科書に難かしいやつを使ってやろうとウォルター・ペーターのルネサンスとカーライルのサファ・リサータスを使った。実はこちらが弱ったが勉強にはなった。そのじぶんの生徒は今より出席もよかったし、よくついて来たように思う。満点にちかい点を取ったそのじぶんの生徒の顔を想いだすことができる。よく美校の生徒はどうとかこうとか評判されそのでたらめさが伝えられているけれども一面本気で勉強するものもいて教師としての気分はわるくなかった。私の性分に合ったところがあったのかもしれない。翌年学年がわりの時から美学の講義を持つことになった。四年生のクラスであった。まえから美学会でなじみであった菅原教造先生が持っておられたのであるが美学科卒業であるというので若僧の私に譲られたのであるが大弱りした。手頃な日本の参考書がなかったし、阿部次郎先生の岩波版「美学」だけのうけ売り講義もできないし、だいたい具体的な話をしないと生徒がうけつけない。私がフォルケルト美学三巻とデッサールの本を講義準備のためとはいえ精読したのはこのじぶんで、そのおかげで今でもこの美学を抜けきれないでいる。森鷗外先生も美校で美学を講ぜ

られたことがあったのだが、フォルケルト美学の日本への紹介者は先生だったから妙な因縁である。別に意識したわけではなく、フォルケルトの本が読み易いし美術文学の作品例が豊富であったから美校での話には都合がよかったのである。このおかげで読んでいる外国文学などをやたらに読んでフォルケルトの言うことを納得しようとした。

こんなことから私の美校教師時代が始まったのであるが、美校講師の正式辞令は大正十一年四月で、そのころの帝大の先生がたはおおかた亡くなられ生徒であったもののうちから大家になった人たちも多い。考えれば幸な出発であったかどうかはわからないが師と友人の善意のほかに、これら学生たちの実際の勉強と仕事をりがいいあいだ見てきたことは理論の書物だけに明け暮すよりずいぶん自分にプラスになったことが多く、まったく幸だったと想うよりほかはない。

〔中略〕大正十二年九月あの関東大震災があった。この災害を境にして社会の様相も急変したとよく言われるけれども学校での私の身辺ばかりでなく美校教師としても、赤の学生指導の役を正木先生から言いわたされてだんだん苦勞も多くなり社会や思想の推移にも眼を向けざるを得なくなった。美術評論壇にも特別な調子が見られ始めたのもこのころからのように思う。

⑤ 卒業式

昭和二十四年三月二十四日、第五十九回卒業証書授与式が行われ、左記の生徒が卒業した。